

Title	花山だより (皇太子御降誕奉祝)
Author(s)	星見山人
Citation	天界 = The heavens (1933), 14(153): 116-116
Issue Date	1933-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/165461
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

たまに、Allegheny 山脈を曲折して横切るのである。今まで見なれた廣い平野は消えて、山と谷との間を汽車はうねり行く。ハリスバーグ、アルトナ、ジョンスタウン等の市は何れも多少の人口を擁し、旅人の眼を惹く。（つづく）

花 山 だ よ り

既に北山は時雨れてゐる。赤々と燃えるストロブの傍で、松の梢を鳴らす木枯しを聞いてみると、遠くで暮進する列車の轟、続いて汽笛が一聲追ひ迫る様に「ポー」と聞こえる。花山の風の夜は、何んとか冬籠りと言つた感じである。夕食後の一と時を花山だよりでも書かうかと筆を取ると、何處からかギターの音がひびいて来る。

少し舊聞に屬するが大きな出来事と言へば先づ第一は、久邇宮若宮殿下の花山行啓を仰いだ事である。此の光榮の日は昭和八年十月28日土曜日の午後。當時相憎、山本臺長は日本學術協會の廣島總會へ出席のため御不在だつたので、上田教授が御案内申し上げる爲め定刻少し前に山へ來られる。続いて、宮殿下御在學中の京都府立第一中學校長並に職員數氏や、御學友達數名も來られる。斯くて午後2時半頃、御召自動車は本館玄関に御着。宮殿下には直ちに應接室に入らせられ、此處にて臺員一同に拜謁を賜はる。終つて臺内御一巡、先づ大赤道儀室、次いで本館露臺、此處では彗星搜索機で比叡山頂を御覽に入れる。続いて時計室、子午線館、46糎反射鏡、太陽館、天文寫眞陳列棚等を御案内申し上げ、最後に圖書室で幻燈を映寫して御覽に供した。此の間約2時間、種々の御説明をいとも御熱心に御聴取遊ばされて、5時少し前、御機嫌麗はしく御歸館遊ばされたのであつた。

11月24日は雨天であつたが突然、京大岸書記官の案内で、大阪帝大總長長岡半太郎博士が參觀に來られたので山本先生が、構内を御案内された。

吾等の公文さんが12月1日に歸つて來られた。然かも、非常時日本に適はしい否、非常時日本を背負つて立つ有爲の青年將校となつて歸つて來られた。その御祝に、翌日三島亭で公文少尉殿歡迎會が開かれた。流星觀測慰勞會を兼ねてではあつたが甚だ盛大に……。此れから暫らくの間花山はきつと戦争談に花が咲く事であらう。

（星見山人）